

共生のきずなを求めて!

# NPO 現代座

2018 年 11 月 1 日 発行  
(通巻 479 号)

## 現代座レポート No. 76

- ・第 2 回 川崎平右衛門研究会 (1)
- ・新企画・スクリーンで見る木村快の作品 (2)
- ・木村快作品の台本を読む会／ちょっとしたお知らせ (3)
- ・満蒙開拓を振り返る②ごく簡単な歴史の流れ (4-5)
- ・われらの笠木透 CD 文庫パラギソングの制作 (6)
- ・NPO 現代座正会員～武本英之をしのんで (7)
- ・会館日誌 (7)
- ・お知らせ 会員入会、継続、寄付 (8)

NPO 現代座ホームページ <http://www.gendaiza.org/>

特定非営利活動法人 NPO 現代座 発行責任者：木村快

〒184-0003 東京都小金井市緑町 5 丁目 13 番 24 号 TEL 042-381-5165 (代) FAX 042-381-6987

### 第 2 回 川崎平右衛門研究会 いよいよ羽ばたく協同組合

10 月 12 日(金) 東京永田町の参議院議員会館会議室で「第 2 回川崎平右衛門研究会」が開かれました。

会場が参議院議員会館会議室ということで、現代座メンバーは緊張して出かけました。ボディチェックを受け、認識カードをぶら下げて会議室へたどりつくと、なんと、ごく普通の会議室でした。参加者は 86 人でした。

◆午前 10 時、葛谷栄一事務局長の司会で始まり、研究会会長・大石学教授の講演「川崎平右衛門と災害復興と自助・共助・公助」が行われました。

を続けてきた興禅寺住職の東海良興和尚の「ずっと平右衛門さんのように生きたいと思いつけた」というお話は心を打つものがありました。

◆午後は研究発表。徳川記念財団非常勤研究員の守屋龍馬さんの研究報告「川崎三代と石見銀山」。江戸・東京博物館学芸員の眞下祥幸さんの研究報告「展覧会解説と江戸東京たてもの園特別展『川崎平右衛門展』を振り返って」。

◆現代座の朗読「協同の夜明け」も行われました。

黒沢義之、長谷川葉月、東志野香、矢川千尋、木下美智子の出演。合唱構成劇『武蔵野の歌が聞こえる』を 15 分の朗読に構成し、最初と最後の合唱を入れて朗読しました。照明も舞台も無い中ですが、初めて見た方からは「良かった!」と言っていたが、何度も見ている方からは「あの場面が一番好きです。」と声をかけていただきました。

◆いよいよ羽ばたく協同組合

◆岐阜県瑞穂市の棚橋敏明市長の記念講演「瑞穂市に今も遺る川崎平右衛門治水翁の偉業」で平右衛門の治水事業とそれが大事に保存されていることの紹介がありました。

◆瑞穂市ではずっと平右衛門の法要が行われており、昨年の 251 回忌でした。その法要

デイスカッション司会

永戸祐三氏

研究会会長  
東京学芸大

大石学教授

日本協同組合連携機構  
代表理事

勝又博三氏

同志社大学大学院  
同志社女子大学  
浜矩子教授

浜矩子教授



## スクリーンで見る木村快の作品

## 第1回 1988年制作『風は故郷へ』

## ◆新しい企画

会館企画の制作を担当してきた木下美智子が、昨年から両親の介護のため長野市に在留しているため、現代座会館の企画が思うように進みません。そこで木下まかせにしないでみんなで新しい企画を考えようと、NPO現代座の正会員を中心に「武蔵野の歌が聞こえる」の出演者が集まって協議しました。

## ◆時代を映す木村作品

現代座には木村快の台本だけでも1965年以来50本以上の作品があり、劇場で実際に上演された映像が残されています。それらの映像には観客の反応がはっきり録音されていて、その時代が抱えていた問題や人々の心の反応がよくわかります。

統一劇場・現代座の作品は常に多くの劇団員が全国各地域の実行委員会と話しあい、作品のテーマと題材が決められました。作者はそれに基づいて取材チームをつくり執筆。芸術的完成度より、常に観客の生活感情を正確に反映させることが大切にされました。

そのため今と比べてみると、制作された時代特有の人々の関心や生活感情がはつきり浮かび上がって来ます。

## ◆舞台作品上映会と台本を読む会

①作品研究のためにこれまで映像資料をつかっていたので、ぜひ、話題になった作品をみなさんに観て貰おうということが決まりました。

②同時に木村作品の再演をめざして「台本を読む会」を定期的に開くことも決まりました。

## ◆第1回上映は『風は故郷へ』

第1回は1988年制作の『風は故郷へ』を上映することになりました。そのため資料の準備もすすめています。

古い映像ですが、3Fホールのスクリーンを使ってみなさんと一緒に作品を観ながら、その時代を振り返り、考える機会にできればと思います。

次いで1990年の『もくれんのおた』、1981年の『出航』、1983年の『遙かなる島』、1987年の『星と波と風と』などの準備を進めます。

## スクリーンで見る

## 木村快の作品

## 第1回『風は故郷へ』

日時：12月8日(土)  
13:00、17:00

場所：現代座会館  
3F小ホール

参加費：1000円  
小中高 500円

定員：各回40名(予約優先)

申込み：Tel 042-381-5165

Fax 042-381-6987

utatane8@gmail.com

(長谷川)

## 『風は故郷へ』について

木村 快

大の虫が生きるために  
小の虫が踏みつぶされる  
小さな虫が人間であるための  
新しい歌が欲しい  
新しい歌を運ぶ風が欲しい

## ◆取り残された側から

この作品は1987年に半年かけて、北海道大雪山麓に点在する満蒙引揚者の戦後開拓地を取材し、88年に制作したものである。取材で出会った人たちはたんと笑顔で語るのだが、その実態は深刻だった。

わたしが聞き取りした開拓民の多くは根っからの農民ではなく、農民になろうとした人たちであった。つまり国の政策にしたがって農民になった人々である。かつては「国を支える誇りある仕事」と自分に言い聞かせてきたが、今となっては多くの家族や仲間を失い、開拓に入ったことは不運だったと思っている。もし、わたしがそこに生まれ、そこで生活する人間だったらどうするだろうと考えた。

## ◆暖かい話は成り立つか

もちろん劇場作品であるから、深刻な話としてではなく、人々の願望を反映した暖かい話として書きたい。深刻な現状を見据えながら暖かい話を創造するということは実に矛盾した話だが、避けることのできない時代の中にあつて、どんな生き方があるだろうかと考えてみた。

困難に直面するついで逃げ腰になり、考えたがらなかったことを、あるときふっと覚悟を決めたとき、思いがけず視野が広がることもある。ささやかでいい、「自ら生き始める」、それがわたしの願う人間の暖かさなのだ。

## ◆立ち上がる老人たち

少年時代は満蒙開拓義勇軍に参加し、終戦と共にシベリア抑留、帰国後は北海道開拓と、ひたすら国策に従った男たち。いつかは苦勞の実る日もくると信じて働きつづけた。みんなで協力して学校も建てた。しかしや々と子どもが成人したところで直面したのは、1960年代以降の農業構造改善事業と呼ばれる農業政策の転換で、生産性の低い開拓地は切り捨てられる事態が進行していた。

子どもたちは街へ出て暮らすようすすめるが、老人たちは人生最後の抵抗に立ち上がる。幻想に絶望したとき、意外にも老人たちはそこに新しい世界を発見する。故郷を捨てようとした若者たちも、頑固な老人たちに振り回されながら、あらためて人間の暮らしとは何かを考えはじめた。



### 木村快作品の台本を読む会

再演できる作品を見つけるために、たくさんある木村快作品の台本をみんなで声を出して読み合わせ、理解を深めようという会がスタートしました。

第1回は10月21日『風は故郷へ』の台本を7人で読んでみました。

『風は故郷へ』は1988年から3年かけて全国で158回上演された作品で、1980年代北海道の戦後開拓地が舞台です。この作品には取材記録をまとめた書籍もあります。劇中の歌は過去の公演の録音を聴きながら進めました。

#### ◆芝居台本の特徴

上演台本は戯曲や小説などと違って、ただ読むだけではイメージがつかめませ



ん。芝居は俳優の行動がその場に居合わせる観客と心を通わせ、一体感を味わう芸能です。何人かで声を出して読み合わせる必要があります。

#### ◆台本読み合わせの魅力

日常生活では人は言葉より相手の表情から心を感じ取りながら対話します。台本を理解するには、表現技術より素直な生活感が大切です。

たとえ開拓農民の経験がなくても、配役を受け持つ人が自分なりの役柄を設定し、声を出して読み合つと、不思議なことにそれぞれの心にお互いの人間関係や、生活反応が起こり、周囲の風景まで見えてくるようになります。

#### ◆今回、作品を読んでみた感想

「開拓時代の様子を語るシーンではいまやっている『武蔵野の歌が聞こえる』を思い出した。」「30年以上昔の話とは思えない。いま、時代が似てきているのかな」などなど。私たちが忘れてはいけない歴史を感じたようです。

次回は『もくれんのうた』を読みます。一緒にやってみましょう。

### 台本を読む会

日時：毎月・第3日曜日  
13:00～16:00

場所：現代座会館

参加費：500円

11月18日(日)  
13:00~16:00  
『もくれんのうた』です

### 第2回は『もくれんのうた』

全国106公演、ブラジル15公演

竹内健太郎一家は満州からの引き揚者。健太郎は家族の生活を支えるため九州の炭坑で働いた。だが1960年代のエネルギー政策の転換で炭坑が廃山に追い込まれ、健太郎は離職者対策でブラジルへ渡った。

三十年後、母の最後の便りに「もくれんに遠く我が子の傷を見る」という不思議な俳句が記されていた。健太郎は思い立って墓参のために帰国。日本はまるで夢のような豊かさで満ちあふれ、かつて仕送りをつづけた妹や弟も幸せに暮らしていた。だが健太郎はもう忘れられた存在だった。

かつて母親のために購入した畑の一隅にはハクモクレンの木が今も純白の花を咲かせている。だがその畑も売り払われるらしい。健太郎は30年ぶりの帰郷を後悔するが、かつての親友の娘が障害者施設の建設に奔走していることを知り心を癒やされる。



初演の舞台から  
左右田一平と木下美智子

母親が残した謎の句について兄妹で語り合ううちに、兄妹の心に大きな変化が起こり、その畑を障害者施設に寄付することになる。

健太郎は晴れ晴れとブラジルに帰って行った。

### 【ちよっとしたお知らせ】



『未来を耕す農的社會』

髙谷栄一著・創森社 二〇一八年九月刊

\*第四章「協同の源流を探る」のタイトルで、江戸時代の武蔵野新田開発を劇化した木村快について、かなり詳細に紹介されている。



河出ブックス100

『青年の主張・まなざしのメディア史』

佐藤卓己著・河出書房新社 二〇一七年刊

\*かつてのNHK青年番組「青年の主張」を文化史として構成。なぜかNHKには1958年の第四回最優秀賞木村快の原稿だけが保存されておらず、本人とも連絡不能とのこと。著者はネットで木村快著『希望への旅』を見つけ、かなりのページをさいて当時の状況を記述している。ああ、そんな時代もあったネ。

## 満蒙開拓を振り返る②

## ごく簡単な歴史の流れ

木村 快

8月に発行した現代座レポート75号で「長野県に残る戦後開拓地の廃墟を歩きながら、あの満蒙開拓とはいったい何だったのかを考えている」と書いたら、古い支持者の方々から思いがけない質問や励まし寄せられた。関心ある人のために、もう少し広い視野で満蒙開拓の歴史の流れをごく簡単に紹介してみたい。

満蒙問題については戦後の東西冷戦終了まで、すべて戦時中の日本側の記録と体験談をもとに語られてきた。冷戦後、ロシアをはじめ諸外国の公文書が開示され、やっと全体像が見えてきた。

歴史というものは常に生活者の視点で見直される必要があると思う。「いやな歴史は忘れて、未来に向かって創造的な関係を築こう」などというタワゴトは、われわれを再び破滅の罫に追い込むのではないか。

## 【第1期】 満蒙全体の支配を狙う

◆関東軍 明治38年の日露戦争勝利でロシアから受け継いだ満州の権益を守るため、中国から租借した遼東半島に専門の部隊が置かれ、それを関東軍と呼んでいた。満州には多くの日本人が在住していたため、関東軍は独立した行政権を持つ特殊な軍隊であった。

揺れ動く帝国主義の時代、当時の中国はまだ強力な統一国家ではなく、満州ではいくつもの地方軍閥が主導権争いをくりひろげていた。関東軍はその争いを利用して日本の権益を広げる機会を狙っていた。

その上で最大の関心は日本に敵対心を持つソ連軍の動向であった。日本の権益は遼東半島と満州中心部の

長春までの南満州鉄道とその付属地だけである。関東軍はソ連との国境に囲まれた満州と内蒙占全域、つまり【満蒙】を勢力下に置くための戦略を練っていた。

◆【昭和3年】張作霖爆殺事件 6月、関東軍参謀・河本大作の指令で東宮鉄男（かねお）大尉が満州軍閥



の張作霖將軍の列車を爆破して殺害した。田中首相は天皇に、もし関東軍が関わっていたなら厳罰に処すと伝えながら、国内ではこれを公開せず、密かに河本大佐の停職、東宮大尉の岡山連隊への転属で済ませたため、天皇の叱責を受け、昭和4年2月、内閣は総辞職した。

◆【昭和6年】満州事変 9月、関東軍は張作霖爆殺事件同様の手口で「中国人が満鉄線路を爆破したので鎮圧する」との口実で一挙に満州全土を占領する。

◆【昭和7年】満州国の建国 事変から半年後の3月には、国際的非難を浴びながらも関東軍は【満州国】を建国し、満州国の行政を関東軍の支配下に置く。

◆武装移民計画 そして「満州移民計画」を提出していた張作霖爆殺事件の主犯、東宮鉄男を関東軍司令部附として復帰させ、同時に満州国の軍政部顧問に就任させて満州開拓事業を展開することになる。本来は開拓事業は拓務省の管轄だが、満州では関東軍の指導で事業をすすめていた。

東宮の主張する満州移民はロシアのコサック兵のように、開拓を進めながら、いざというときは軍隊として行動できる武装移民である。

## 【第2期】 皇同派と統制派の対立

当時、陸軍内では過激路線を志向する【皇同派】と、

これを統制しようとする【統制派】の対立が高まりつつあった。

◆永田鉄山 軍の過激な動向を懸念する統制派の間で



は永田鉄山（てつさん）が注目を集めていた。鉄山は近代国家にふさわしい軍のあり方を志向し、政党や民間人も協調しながら信頼を集めていた。

◆【昭和7年】満蒙開拓の可能性調査 参謀本部軍務局長の永田鉄山は関東軍の移住計画に懸念を持っていた。同じく統制派の陸軍次官小磯国昭も皇同派の陸軍大臣荒木貞夫から関東軍参謀長への左遷を命じられ、満蒙開拓について検討していた。

国際的納得を得られる開拓は可能か。小磯と永田鉄山はブラジル移民で大きな実績を積んでいる永田稠を招いて、満州開拓の可能性について意見を求める。永田稠は「移住は先住者が納得できる視野で検討する必要がある、それを指導できる人物は梅谷光貞以外にいない」と推薦する。



◆梅谷光貞の起用 梅谷光貞は大正期には内務官僚として台湾、中国、朝鮮、アフリカの欧米植民地視察を繰り返した専門家である。退官後は海外移住組合連合会専務として、ブラジル国法にもとづいて4



大日系移住地を建設している。だが昭和6年に平生三郎理事長が移民政策を戦略物資獲得路線に転換したため、辞表を叩きつけて辞職。統制派側からの満州移住の可能性を調査するには打ってつけの人物だった。

◆小磯国昭関東軍参謀長着任 昭和7年8月、小磯は関東軍参謀長に就任するとただちに関東軍内に民間人

の担当する部署として「特務部」を特設し、梅谷光貞を移民部長に就任させる。梅谷は開拓民の安全とインフラの整備、経済の流通は日中ソの軍事的バランスで変動するため、まず現地の情勢を判断しながら移住可能用地の調査に全力を挙げる。

◆吉林(きつりん) 頓墾軍機関隊 一方、東宮鉄男は関東軍指令部に「吉林頓墾軍機関隊編成具申書」を提出し、拓務省はそれを基にして10月、国内で在郷軍人会所属の独身男性を募集し、武器弾薬を携行した佳木斯(ジャムス)屯墾軍第一大隊を編成する。

◆【昭和8年】武装移民の挫折 4月、屯墾軍第一次武装移民団492人は佳木斯の弥栄村(いやさかむら)に入植する。開拓地は地元農民から半ば強制的に買収だが、農業機材は古く、生活設備も不十分で病気や精神疾患により大量の人員が脱落。7月には団員の間で幹部排斥運動が起こり、拓務省に抗議文を送付する事件まで発生している。

◆参謀本部の実情調査 永田鉄山は永田桐に屯墾軍基地の実情視察を依頼。永田桐は陸軍省囑託として渡満。永田桐は永田鉄山に実情を報告し、鉄山は参謀本部経由で関東軍に注意を与える。これに対して拓務省官僚と東宮鉄男は激怒したと伝えられている。

◆【昭和9年】小磯参謀長転出で永田・梅谷の追放 2月、小磯は人事異動で第7師団長へ転出。東宮派が勢いを盛り返し、梅谷・永田桐の追放が画策される。

12月、永田桐は満州移民会議で「インフラの整備、農産物の流通、住民自治の重視」を主張するが、「国策を理解しない経済派」と攻撃され、移民部会から追われる。さらに移民部も廃止され、梅谷はすでに400万円の土地を買い付けていたが、退官して帰国し、病没する。

◆【昭和10年】永田鉄山殺害される 関係者は永田鉄山がどう対応するか注目していた。ところが8月、永田鉄山は執務室で皇同派の相沢中佐によって殺害される。これがその後の軍内部の情勢を大きく変化させ、満州移住政策にとっても大きな転換点となる。

◆【第3期】本格的移民開始・大東亜戦争への道 ◆【昭和11年】ニニニ六事件 2月26日、永田鉄山殺害で勢いづいた皇同派将校が反乱軍を組織し、高橋是清蔵相、斎藤実内相などを殺害。これに対して参謀本部作戦部長の石原莞爾が戒厳司令として制圧。皇同派は息の根を止められた形だが、対立関係がなくなると、統制派も存在理由が薄れて分解。無責任体制が進む。

◆【昭和12年】盧溝橋事件から日中戦争へ 7月、北京郊外の日本軍の演習中、中国軍との間で紛争が起こる。【盧溝橋事件】である。これを口実に陸軍は本格戦争へと拡大させ、近衛内閣もこれを承認する。



参謀本部では石原莞爾作戦課長が「あくまでも停戦協定を結ぶべきであり、戦争を長期化させることはひいてはアメリカとの戦争につながる」と徹頭徹尾反対するが、9月、石原莞爾は作戦部長を解任され、関東軍参謀副長へと左遷される。

◆20年間100万戸500万人移住政策 東宮と拓務省は当面は武装移民を中止し、代わって農民の家族移住をベースとした移民に転換。そこで広田内閣は「20年間100万戸、500万人移住」を国策に掲げる。

◆【昭和13年】満蒙開拓青少年義勇軍発足 16歳から19歳までの少年たちに軍事訓練をほどこし、中隊編成の武装開拓民としてソ満国境中心に配置。送り込まれた少年達は昭和20年までに8万6千人に達した。

◆石原莞爾の東条英機批判 昭和13年8月、石原莞爾は関東軍参謀長東条英機の満州国政策を批判し、参謀副長を解任される。以後、軍のあり方をチエックする人材は皆無となり、戦争へ戦争へと突き進む。

◆【昭和14年】ノモンハン国境紛争 昭和14年5月、9月、関東軍は満州北西部ノモンハンでソ連軍と国境紛争をつづけ、大きな損害を受ける。関東軍首脳は責任を取らず、現場部隊長たちの自決で終わらせる。

◆【昭和16年】10月、東条英機内閣成立 12月8日、大東亜戦争開始。



◆【昭和19年】7月、東条内閣総辞職 ◆【昭和20年】7月、政府は近衛文麿をソ連に派遣、連合国との停戦の斡旋を依頼するがソ連側は拒否。関東軍はソ連軍の満州侵入前に撤退。

8月ポツダム宣言受諾。無条件降伏。満州開拓民は混乱しながらも昭和22年まで放置され、集団自決、避難中の病没などで、27万人中8万人が死亡。

◆【昭和20年】9月、連合国軍最高司令部(GHQ)の占領支配開始。

◆【昭和22年】満州開拓民、ソ連抑留者の帰国はじまる。

◆【昭和25年】6月に朝鮮戦争始まり、8月にはGHQの意向で警察予備隊発足、やがて自衛隊となる。

◆【昭和26年】9月、サンフランシスコ講和条約締結。日本国独立。

\*\*\*\*\* 満蒙開拓移民の強行はそのまま大東亜戦争、敗戦へと直結した流れをつくり、永田鉄山が懸念し、石原莞爾が予言した通りになってしまった。私たち日本人の文化の問題として振り返る必要があるかもしれない。

## われらの笠木透 「パパラギソング」CD制作 細田 伸昭



細田 伸昭（ほそだ・のぶあき）元高校教師。現代座で開催されていた「寺子屋」（専任講師は笠木透、木村快、安達元彦）の寺子屋長を務めた他、声なき声の会（世話人）、くらしうた研究会、石仏一語らいの家、ラウラの会、等々の市民活動に関わる。

台風21号が日本列島を直撃した9月3日と4日。現代座会館3階の小ホールで「パパラギソング」のレコーディングが行われた。「パパラギソング」とは、フォークシンガーの笠木透さんが、1982年に出版された本「パパラギ」に感動して、11編の詩を書き、当時一緒に全国を回ってコンサート活動をしていた作曲家の安達元彦さんが曲を付けた歌のことだ。「パパラギ」とは白人のことで、本は、1920年代にヨーロッパを旅したサモアの酋長が、「近代的で非人間的」なパパラギの生活を、サモアでの自分たちの人間的な生活と比較して、パパラギのようになるのはよそつと説いた話をまとめたものだ。

笠木さんは、80年代には「パパラギソング」をコンサートで良く歌ったものの、それ以降はほとんど歌うこともなく、CDに収録されることもなかった。笠木さんが亡くなった後、「パパラギソング」をCDで残したいとノートに書き付けていたことを知り、安達元彦さんや増田康記さんが音頭をとって、CD文庫作りをすることになった。「ラウラの会」と名付けた実行委員会は、「クッキングハウス（※）」や現代座会館で開催されていた「寺子屋」に集った仲間たちを中心に構成された。4月の準備会から様々な役割を分担し、9月のレコーディングに漕ぎ着けたのだ。

マイク、ミキサー、録音機材を小ホールに持ち込み、安

### 「パパラギソング」

【完成記念コンサート】

日 時：12月17日（月）  
13:30～16:00

場 所：府中市 パルトホール

参加費：2000円

問合せ：042(496)5177  
クッキングハウスまで

CD文庫 1000円

※「クッキングハウス」は心に病を持つ人が、地域の中でたすけあって働き暮らすための拠点として1987年に設立された自然食レストラン。笠木透さんとは、コンサートや歌作りを通してずっと関わりがあった。調布駅徒歩5分の所にある。

達さんや増田さんに、岡田京子さん、熊倉正博さんが加わり、内3曲には、クッキングハウスのメンバーを中心にした「ラウラウ合唱団」も加わった。台風による暴風雨にもめげず、和気あいあいの中で行われたレコーディング。CD文庫は、12月22日の笠木さんの命日にあわせて出版される。これに合わせて完成記念コンサートを12月17日に府中の「パルトホール」で開催する。  
みなさん、是非予約を入れて下さい。よろしくお願ひします。



笠木透（1937～2014）日本のフォーク・ブームを生み出した仕掛け人の一人。多くの歌手がマスコミに流れる中、独自に「我夢土下座」（カムトゲザ）を結成し、全国の町や村でコンサートを展開した伝説的人物。◆写真は2010年、現代座ホールの寺子屋コンサートのときのもの。



クッキングハウスの「ラウラウ合唱団」



◆笠木透の相棒として駆け回ったピアニスト 安達元彦。

思い出すこと 木村快 ◆1983年、統一劇場が三つに分かれ、家族持ち中心の現代座の先行きが危ぶまれたとき、岡田京子さん呼びかけの激励集会に、笠木さんが真っ先に駆けつけてくれたこと。◆2012年『友の呼ぶ声』の長野県塩尻公演のとき、「快さん、頑張るとるなあ」と声がした。見ると中津川から駆けつけた車椅子の笠木さんと増田康記さんだった。「車椅子じゃ大変だね」と言ったら、「なーにまだまだ、これからも飛び回るよ」と豪快に笑っていた。

武本英之よ やすらかに

2018年10月1日、NPO現代座の脚本担当スタッフ・武本英之が突然亡くなった。急性心不全で本人も気がつかないうちに亡くなったらしい。その半月ほど前、電話がかかってきて「木村快さんの若い頃のことを書かれた本を見つけたよ。会えませんか」と言う。ぼくは今長野市在住でめったに顔を合わす機会がなかったのに、急いで帰った。届けられた本は『あの国民的番組・青年の主張』（筑摩書房）だったが、実は彼が話しかかったのは、危機にある庶民の足・タクシーの自立と協同を試みる人たちを新作として書きたいという相談だった。よしやってみようということで、資料集めにかかったところだった。

現代座に参加した当時はタクシー業界新聞のデスク記者で、現代座レポートで2010年から24回にわたって「現代座を支える人々」の取材執筆を担当していた。最近、会社の事情で急に社長になり、全く時間がとれないのだと頭を抱えていた。タクシー業界はいま大変な苦境で、いろいろ社内の事情もあったのだろう。

彼の作品はタクシー問題を企業文化の問題、ドライバーの人間文化の問題として描くことが特徴だった。2008年の『わすれものはありませんか？』はクチコミで話が広がり、千葉県タクシー協会の公演、世田谷の福祉移動支援センターの公演と広がっていった。



2010年のレポートで紹介した写真。

2011年の『ここは幸せゼロ番地』では潰れかかったタクシー会社の休憩室を舞台にして様々なタイプのドライバーや企業の抱える問題が描かれていた。現代座は武本英之の意思を受け継ぎ、タクシードラマの再演と作品創造に努力したいと思っている。

武本英之は九州福岡生まれの博多っ子。早稲田大学出身。学生時代はバックパッカーで世界中を歩き回ったロマンチストだった。(木村快)



武本英之作「ここは幸せゼロ番地」2011年



武本英之作「わすれものはありませんか」2008年

現代座会館 8月〜10月 活動日誌

- 8月9日 「現代座レポート75号」発送作業
- 24日 現代座創造グループ会議
- 9月18日 現代座創造グループ会議
- 21日 木谷氏とワーカー・藤田氏・川原氏・黒田氏来訪
- 23日 岡田京子氏来訪
- 10月5日 武本英之氏葬儀に参列
- 21日 第1回・木村快作品の台本を読む会
- 31日 ドキュメンタリー監督宮尾哲雄氏来訪
- 毎月第3木曜日「緑町ふれあいサロン」

- 〔現代座ホール〕
- 7月23〜8月19日 クロジ「いと恋いめやも」稽古
- 8月20〜24日 トマト座稽古
- 10月3〜7日 むさしの芝居塾
- 「シンデレラストーリー」公演
- 16〜21日 演劇商店若櫻「延長線上に居る僕」公演
- 24〜11月2日 劇団希望舞台「釈迦内板唄」稽古

- 〔三階小ホール〕
- 9月3・4日 ラウラウの会
- 13〜16日 劇団ハケツまみれ
- 「被つてすむなら友達はいらない」公演
- 18日 平右衛門研究会・朗読「共同の夜明け」稽古
- 10月7日 スタジオ・ポラーノ稽古
- 11日 平右衛門研究会・朗読「共同の夜明け」稽古
- 19〜22日 劇団希望舞台「釈迦内板唄」稽古
- 26〜28、31〜11月1日 スタジオ・ポラーノ稽古
- 隔水曜日 朗読教室
- 毎火曜日 ヨガ教室

- 〔定期使用 二階サロン〕
- 毎日曜日 教育文化経営学院（学生支援）
- 毎水曜日 熟年パソコンサークル
- 隔木曜日 iPad 熟年講座

## お 知 ら せ

TEL 042-381-5165  
FAX 042-381-6987西日本チャリティライブ from こがねい〜  
雨のちにじ@現代座

小金井のゆかいなアーティストたちによる西日本豪雨災害へのチャリティライブ。NPO 現代座は会場提供とスタッフ協力させていただきます。

// 出演アーティスト //

★ビッキー&amp;ももな ★マスター木村 ★腹話術師いずみ

日 時：11月24日(土) 14:00～

会 場：現代座会館3階

チャージ：大人2000円、中高生1000円、小学生500円  
席を必要としない乳幼児は無料。

予 約：小さな会場です。ご予約下さい。

申込み先 kakashan0215@i.softbank.jp

7月初旬に起きた西日本豪雨災害。自分たちにできることはないか、と考えた私たち小金井のゆかいなアーティストたちが、みなさまへライブをお届けします！ぜひ、お越しください(主催・腹話術師いずみ)

「スクリーンで見る  
木村快の作品」

## シリーズ第1回 『風は故郷へ』

日 時：12月8日(土) 開演13:00(開場12:30)  
開演17:00(開場16:30)

場 所：現代座会館3階小ホール

参加費：1000円 小中高500円

定 員：各回40名(予約優先)

予 約：TEL：042-381-5165 FAX：042-381-6987

E-mail：utatane8@gmail.com(長谷川)

NPO 現代座  
誰でもできる朗読教室

## 第6期生発表会

日時：2018年11月28日(水)  
13:00開場 13:30開演  
(16:40終演予定)会場：現代座3階小ホール  
(入場無料)

2018年6月から11月まで、6ヶ月間の講座を受講した13名が学んだ成果を発表します。

## 第7期 受講者募集！

## 2019年1月開講

## 基礎訓練から舞台発表までの12回講座

&lt;講師 長谷川葉月 &gt;

開講期間：2019年1月～2019年6月

日 時：毎月第2・第4水曜日(原則)

※1月のみ第3・第5水曜日です

昼クラス 午後1:30～4:00

夜クラス 午後6:00～8:30

募集定員：各クラス8名程度

料 金：受講料18000円+教材費1300円

◎近代から現代の文学作品などをテキストにした初心者向けの講座です。基礎訓練を取り入れて、朗読に適した声作りをしていながら、作品を読む楽しみを味わいましょう。

※詳細お問合せは

NPO 現代座まで

TEL：042-381-5165

FAX：042-381-6987



## NPO現代座の会員になってください

- 年間4回発行の活動レポートをお送りします。
- 会員による企画行事をお知らせします。
- お申し出があれば、上演舞台の録画DVDをお送りします。

★年会費(現代座レポート購読料を含む)

一般会員 3,000円

協賛会員 10,000円(1口以上)

郵便振替口座番号 00110-7-703151 NPO現代座